

法然上人思想史の回顧と展望

林田 康順

一、はじめに

インド・中国・朝鮮を東漸し、さまざまな信仰形態・思想内容へと展開してきた浄土教であるが、わが国における教義の緻密化は他地域の追隨を許さないであろう。そうしたわが国において、従来の浄土教信仰への根本的な変革をもたらしたのが、法然上人（以下、祖師の尊称略）であることに異論を挟む者はいないであろう。源信・永観・覚鑿（天台浄土教・南都浄土教・密教浄土教）等と聖光・証空・親鸞・一遍（鎮西派・西山派・真宗・時宗）等という、わが国の全浄土教者の分水嶺に立つ者こそ法然であり、明恵・道元・日蓮等のいわゆる旧・新仏教者が、等しく批判の矛先を向けたのが法然であることがその事実を端的に物語っている。法然の思想を学ぶことは、法然自身や法然を宗祖と仰ぐ浄土宗の教義・教団を学ぶことに留まらず、法然以前と以後の浄土教、広くは多種多様な仏教の信仰構造を再確認することに他ならないのである。

これほどの変革をもたらすこととなった法然の思想は、「智慧第一」と讃えられた法然自身の弛まぬ修学と高度

な宗教体験によって導き出されたものである。言ってみれば、保延七年春、九歳の勢至丸を襲った父漆間時国公の非業の死を端緒として仏教を学び始めた時から、建暦二年正月二三日、八〇歳の法然が『一枚起請文』を書き遺される時まで、その思考は常に深まり続けたと言い得よう。

もちろん、「三学非器」という絶望感（相対的人間感）に苛まれていた法然が、承安五年春、四三歳にして善導の『観経疏』散善義所説の開宗の文によって回心を遂げ、「信機」の法悦（絶対的人間観）を戴かれて以降、本願念仏による浄土往生の確信という一点について揺らぐことは決してない。

法然は、その開宗の文の意趣の絶対化・普遍化を目指し、その主著であり、浄土宗第一の聖典である『選択本願念仏集（以下、選択集）』において、弥陀・釈迦・諸仏の三仏同心からなる選択本願念仏という浄土宗義を体系化し、弥陀化身たる善導ただ一師に偏に帰依することを宣言された。選択思想とは、念仏・諸行の選び取り・選び捨てる主体を凡夫の側（機辺）から弥陀・釈迦・諸仏という仏の側（仏辺）へと転換・昇華された画期的な思想であり、それは〈自力の仏教から他力の仏教へ〉〈悟りの仏教から救いの仏教へ〉〈智慧の仏教から慈悲の仏教へ〉という仏教そのものの大転換であった。¹⁾

昭和三〇年（一九五五）、石井教道氏は、法然遺文を網羅蒐集し『昭和新修法然上人全集』（以下、昭法全）を刊行した。石井氏は、その説示内容に応じて遺文を全八輯に分類し、その第一輯「教書篇」において体系的に教義が述べられている遺文を収録し、それを思想史順に次のように配当された。この石井氏による整理が法然思想史研究の嚆矢となる。

【石井教道氏による法然上人思想史】（『昭和新修法然上人全集』「序」四頁～八頁）

第一期・浅劣念仏期（要集浄土教時代）——（本願）（選択）不使用

『往生要集』四积書

『往生要集註要』

『往生要集料簡』

『往生要集略料簡』

『往生要集积』

第二期・本願念仏期（善導念仏時代）——（選択）不使用

『三部経大意』『往生大要鈔』

第三期・選択念仏期

東大寺講説「三部経积」

『無量寿経积』

『観無量寿経积』

『阿弥陀経积』

『逆修説法』『選択集』

石井氏は、法然の思想史を三期に分け、第一期を浅劣念仏期（要集浄土教時代）、第二期を本願念仏期（善導念仏時代）、第三期を選択念仏期とされた。第一期と第二期との相違、第二期と第三期との相違は、文字通り（本願）と（選択）の語の使用・不使用にあるとして、第一期として『往生要集註要』『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集积』の『往生要集』四积書を、第二期として『三部経大意』と『往生大要鈔』の二著を、第三期として『無量寿経积』『観無量寿経积』『阿弥陀経积』のいわゆる東大寺講説「三部経积」と『逆修説法』『選択集』等を配

当している。膨大な書誌調査と該博な知識に裏付けられた石井氏による法然思想史の提唱は、まことに画期的であり、その大枠は多くの研究者に支持され続けてきた。

その一方、『昭法全』の刊行から七〇年近くが過ぎ、近時、法然遺文の書誌的研究も広汎に進んでいる。その結果、真跡の少ない法然遺文の解明には、後世の編集・加筆を念頭に考察することが必要不可欠となっている。こうした状況の中、筆者は、石井氏の説を大枠として踏襲しつつ、あるいは、各方面からの個別の検討等を総合的に進めた結果、法然の思想史は次のように推移しているのではないかと想定している。

以下、本論では、こうした推定に至った法然の思想史について、与えられた紙面の中、特に選択思想の成立と展開を中心に言及していきたい。

【法然上人思想史（案）】

（一） 選択本願念仏思想構築期

第一期・浅劣念仏期（要集浄土教時代）（開宗前後から東大寺講説時点まで）

『浄土初学抄』——各宗浄土教典籍を涉猟し、その概要を整理

『往生要集』四积書——『往生要集料簡』（惣結要行重視）

『往生要集略料簡』（惣結要行非重視）

『往生要集釈』（広略要提唱）

『往生要集詮要』（専修思想強調）

二期・本願念仏期（善導念仏時代）——（本願）の使用（法然五八歳前後）

東大寺講説「三部経釈」

称名念仏——易＋困——時機相応

諸行——難＋勝

称名念仏——易＋本願行＋前後多文

諸行——難＋非本願行

善導大師——三昧発得の師、善導義補助の七師（専修重視）

*この頃か？——『念仏大意』『要義問答』等

三期・選択本願念仏期——（選択）の使用

※前期——『逆修説法』（法然六二歳前後）

（選択）使用の嚆矢、弥陀一仏による選択

善導大師——三昧発得の師、浄土五祖の中心

*この頃か？——『類聚浄土五祖伝』『善導十徳』

『三部経大意』『往生大要鈔』等

※後期——『選択集』（法然六六歳）

称名念仏——選択本願行（易＋勝——選取）

諸行——非選択本願行（難＋劣——選捨）

弥陀・釈迦・諸仏三仏同心による八種選択

↓全仏教における称名念仏の絶対性・普遍性の確立

勝劣難易二義の成立、勝劣・大小・多少相對三義の成立

善導大師—弥陀化身善導に基づく偏依善導一師説の成立

*この後か?—『浄土宗略要文』等

〔選択集〕の要文抽出、四修釈・対諸行釈の省略)

〔二〕選択本願念仏思想普及伝道期

各種法語・消息、『一枚起請文』等

二、法然上人思想史概説

〔一〕選択本願念仏思想構築期

第一期・浅劣念仏期（要集浄土教時代）—『往生要集』四釈書—

わが国に浄土教の黎明をもたらした『往生要集』は、善導の著作、特に『観経疏』に出会う以前の法然がもつとも重視された浄土教典籍である。石井氏は、法然思想史の最初期として『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集釈』『往生要集詮要』の『往生要集』四釈書を配当して「浅劣念仏期」「要集浄土教時代」と名付けている。石井氏による「浅劣念仏期」の呼称は、『往生要集詮要』の次の一節に由来する。

観念と称念と勝劣あり難易あり。即ち観念は勝れ、称念は劣なり。故に念仏証拠門の中に云わく、但、念名号

を以て往生の業と為す。何に況や相好を観念する功德をや。又観念は修し難く、称念は行じ易し。

(昭法全五頁)

ここで法然は、観相念仏を勝行であるけれども難行であるとする一方、称名念仏は劣行であるものの易行であるとしており、時機相応の故に称名念仏を勧めている。称名念仏を(劣行)と位置付けるのは、法然遺文の中でもこの箇所が唯一であり、この時期の法然が、観勝称劣という『往生要集』のスタンスを踏襲していたことが分かる。⁽²⁾

これら四積書は、法然が比叡山中、あるいは比叡山を下りた後も、各種要請に応じて『往生要集』を取り上げた際の講義録であると考えられ、各講説時に法然が、いかに『往生要集』を受けとめていたかによって、その記述内容に相違が見られ、現存する写本・版本を巡る書誌も複雑である。こうしたことから四積書の撰述前後についての多くの先学による考察が積み重ねられてきた。

そうした中、四積書全体を通じ、最も注目すべき点が『往生要集』第五助念方法門の第七惣結要行をめぐる二通りの解釈である。すなわち、『往生要集』に「問う。上の諸門の中に陳ぶる所、既に多けれども未だ何れの業か、往生の要と為ることを知らず。答う。大菩提心と三業を護ると深く信じ誠を至して常に仏を念せば、願に随い決定して極楽に生ぜん」(浄全一五・一〇八上)という問答の回答について、法然が独自の視点から①作願門(大菩提心)・②止悪(護三業)・③深心(深信)・④至誠心(至誠)・⑤無間修(常)・⑥称名念仏(念仏)・⑦回向発願心(隨願)の七法にあてはめていく解釈である。

この惣結要行積をめぐる法然は、『往生要集料簡』と『往生要集釈』の後半、『往生要集詮要』において「惣結要行は、往生要集の肝心、決定往生の要法なり」(昭法全一一頁・二二頁・八頁)、あるいは、「此れ即ち此の集の正意なり」(昭法全一二頁・二三頁・九頁)と述べ、源信は七法を重視していると結論付けている。一方、『往生要集略料

『簡』と『往生要集積』の前半において法然は、「七法を選びて以て往生の要と為る」（昭法全一五頁・二二頁）と七法を重視するものの、最終的に七法を「此の集の正意に非ざるなり」（昭法全一五頁・二二頁）と述べ、源信は七法を重視していないと結論付けている。仮に、法然が念仏一行の専修に向かう流れを是として、源信も同様であると考えていたならば、前者から後者への展開に思想的变化があったと解釈できるし、その逆の解釈も可能となる。

なお『往生要集詮要』において、他の三積書には見られなかった専修に向かう構造的・立体的な構成が明らかにする。すなわち、『往生要集』一部一〇門を開合に分け、合として五門を立てる。その五門のうち第一厭離穢土門と第二欣求浄土門を修行方便とし、第三念仏往生門と第四諸行往生門を往生業因と設定し、なかでも諸行往生門を非要として取らず、念仏往生門を要として取る。次に、要なる念仏往生門を再び開合に分け、他の三積書で『往生要集』の要・略などとして扱っていた惣結要行の説かれる助念方法門、及び、別時念仏門・念仏利益門・念仏証拠門の四門を正修念仏門の助成の位置に抑え、正修念仏門を合・要門と規定する。次に、その正修念仏門の中、礼拝門・讚嘆門・回向門、そして七法の菩提心として採用していた作願門の四門を取らずに觀察門を要として取る。次に觀察門の中、勝であるけれども難であるところの観念を取らずに、劣であるけれども易であるところの称念を取り、称念の際に用いる帰命想・引摂想・往生想の中でも引摂想を要として取る。このようにこれまでの三書で重視してきた助念方法門や作願門を取らず、構造的・立体的に称名念仏一行へと向かう姿勢を確立していることが分かる。

また『往生要集詮要』では、『往生要集』第十問答料簡門の往生階位を釈す箇所の特異性も注目される。すなわち、他の三積書では『往生要集』の問答をそのまま引用して私積へ進むのだが、『往生要集詮要』では、善導への傾倒、専雑二修の採用等の説示が見られる。こうした点は『無量寿経釈』や広本『選択集』にも継承されており、

『往生要集註要』の特異性は際立っている。⁽³⁾ 以上のような考察から、筆者は『往生要集料簡』↓『往生要集略料簡』↓『往生要集釈』↓『往生要集註要』という成立順を想定しているものの、その議論はいまだに続いている。法然による『往生要集』四釈書をめぐっては、近年、南宏信氏⁽⁴⁾、齋藤蒙光氏⁽⁵⁾、下端啓介氏等⁽⁶⁾が次々と論考を発表している。それら一連の論考の特徴としては、良忠撰『往生要集義記』など、広く四釈書周辺の文献を用いて法然の『往生要集』観に迫ろうとするものであり、今後の研究の進展が大いに期待される。

第二期・本願念仏期（善導念仏時代）——東大寺講説「三部経釈」——

石井氏は、浅劣念仏期の次に本願念仏期を位置付けている。石井氏によれば、本願念仏期は（本願）の用語はあ
るものの、（選択）の記載が見出せないという。なお石井氏は、本願念仏期の著作として『三部経大意』⁽⁷⁾と『往生
大要鈔』を配当していると考えられる。しかし、両書の記述中にいわゆる善導弥陀化身説が見出されること、至誠
心釈の特異性などから、筆者は両書の位置を後に移行させた方が良いのではないかと指摘している。⁽⁸⁾

そうした中、筆者は、文治六年（一一九〇）、法然五八歳の時に開筵されたとされる東大寺における「浄土三部
経」の講説録である『無量寿経釈』『観無量寿経釈』『阿弥陀経釈』（以下、「三部経釈」）をこの期に配当している。

まずもって、現存する「三部経釈」諸本は、いずれも後人によって『選択集』の記述、特に私釈の大部分が、前
後の内容を踏まえつつ、それらしく体裁が整うように増補されている。この点について、すでに岸一英氏は種々の
論考を通じて「三部経釈」については古層・新層を踏まえて検討すべきことを指摘し、古層の復元に努められた。⁽⁹⁾

法然遺文の書誌、法然の思想史という視点から見た場合、もっとも慎重な検討を要するのが、この「三部経釈」
であり、そこでの「選択」思想の説示であると考えられる。実は法然遺文の中、弟子による伝聞などに「選択」と

いう語が散見されるものの、いわゆる法語・消息などにおいて言及されることはなく、「選択」という語は「三部経釈」と『逆修説法』、そして『選択集』でのみ見出される。もちろん、そのことは『選択集』撰述以後、法然が選択思想の立場を採らなくなったわけではなく、「選択」という語を用いずに選択本願たる称名念仏を平易に説いていたということに他ならない。

そうした中、筆者は「三部経釈」全体の説示内容を踏まえ、「三部経釈」説示時点では、選択思想は成立していなかったのではないかと推定し、「三部経釈」に記載される「選択・選択・選択・選択」の使用例を抽出の上、『選択集』の記述との比較を施した。⁽¹⁰⁾

【「三部経釈」記載「選択・選択・選択・選択」について】

① 『無量寿経釈』

① 選択即撰取の文―選択Ⅱ一四箇所、選取Ⅱ七箇所、選捨Ⅱ七箇所（昭法全六九頁～七二頁）

↑ 『選択集』第三章私釈段（昭法全三二八頁～三二九頁）と同一

② 正定業の文

― 選択Ⅱ二回、選定Ⅱ一回（昭法全八一頁）

↑ 『選択集』第二章私釈段（昭法全三二四頁）、及び、

広本『選択集』第二章私釈段（昭法全三五七頁）と同一

② 『観無量寿経釈』

① 光明平等義の文―選捨Ⅱ一回（昭法全二二〇頁）

↑ 『選択集』に該当箇所を見出せない

② 光明本願義の文―選取Ⅱ一回、選捨Ⅰ一回（昭法全一二二頁）

↑『選択集』第七章私釈段（昭法全三七七頁～三三八頁）と同一

③ 『阿弥陀経釈』

① 念仏多善根の文―選択Ⅱ一回（昭法全一三五頁）

↑『選択集』そのものを示す割注

② 八種選択の文―選択Ⅱ三四回（昭法全一四四頁～一四五頁、一五六頁～一五七頁）

↑『選択集』第一章私釈段（昭法全三四七頁）と同一

このように「三部経釈」には「選択」五二箇所、「選取」八箇所、「選捨」九箇所、「選定」一箇所、これら四語をまとめて都合六九箇所が確認できる。この中、「広本」を含む『選択集』と一致する箇所、及び、『選択集』そのものを示す割注が合わせて六八箇所となる。それら以外で「選択・選取・選捨・選定」の語が登場するのは、②『観無量寿経釈』①光明平等義の文に見られる次の「選捨」一箇所のみである。

一 光明遍照者、釈此文有三義。一平等義、二本願義、三親縁等義。一平等義者、抑弥陀光明、唯照念仏者計、不照余行者何事故。凡思道理、如来無縁慈悲光明、可照一切顕密行人、一切事理行者、何云念仏衆生撰取不捨、念仏行者外一切顕密行者、皆以不照撰取光明、可漏無縁慈悲、其條不審。誦八十六十華嚴、讚事事円融之旨、觀純真法界之理一人、云何被選捨弥陀光明。

（昭法全一二〇頁。なお罫線で囲った八九文字は寛永版系統のみに存在する）
もちろん、ここで「選捨」と記載される箇所が「三部経釈」当初から存在し、光明の撰取・不撰取の問題を論ず

る中で選択思想と関わりなく登場したと考えるても何等不思議はない。しかし、そうした可能性を考慮した上でも、次のような指摘ができればよい。すなわち、この箇所は寛永版・承応版『観無量寿経釈』には「被選捨」とあるものの、正徳版『観無量寿経釈』では「得漏」と説示しており、寛永版系統にも三〇数文字前には「可漏」と、正徳版の「得漏」に対応する語が説示されている。正徳版編纂時、義山が「被選捨」を温存せずに、あえて「得漏」に改訂する必然性は低いのではなからうか。こうしたことから、ここにある「選捨」は、その直後の②光明本願義の文に用いられている「選取」「選捨」に影響されて改変されたのではないかと推定される。

また「三部経釈」中の「選取・選取・選捨・選定」の語が説かれる前後の説示の検討から、『選択集』と同一箇所が存在することによって、その内容が重複し、あるいは、説示が冗長になり、「三部経釈」オリジナルの説示のみである方がその文脈がよりスムーズに伝えられる。このことは、従来から批判的な指摘のある③『阿弥陀経釈』②「八種選択の文」だけでなく、東大寺講説「三部経釈」こそ「選取」思想の嚆矢とする説そのものに疑義を挟まざるを得ないという結論が自ずと導かれるのである。

法然自身も「予は選択の一義を立てて選択集を造るなり」（『浄土宗要集聴聞』巻本「良忠上人伝聞の御詞」昭法全七六二頁）と『選択集』において選択思想を立てられたことを述懐している。ここで指摘した「三部経釈」オリジナルの「選取・選取（選捨・選定）」が存在しないという事実は、こうした法然の述懐を裏付けることにもなり、『三部経釈』講説時点での法然は、善導義補助の七師の選定等、『往生礼讃』所説の専雑二修義を重んじつつ、「平等慈悲」という視点から「仏の本願」に基づく易行なる称名念仏を「前後の多文」（昭法全九〇頁）を通じて説いたと考えられる。⁽¹²⁾

近年、「三部経釈」の書誌をめぐって、井上慶淳氏⁽¹³⁾、下端啓介氏等⁽¹⁴⁾が論考を発表しているが、その本格的研究は、

まだ緒に就いたばかりである。今後は、当時の法然を取り巻く歴史的状況を踏まえて周辺史料の精査を並行して進めていくことが必要となるだろう。

第三期・選択本願念仏期 前期―『逆修説法』―

選択本願念仏期の前期に配当されるのは、建久四年から五年にかけて外記禅門師秀に対して逆修法会を勤修した際の講義録『逆修説法』である。まずもって、法然が「選択」を用いた嚆矢が、『逆修説法』二七日における次の一節であると推定される。

凡そ念仏往生の諸行往生に勝ること多義有り。一には因位の本願。謂わく弥陀如来の因位法藏菩薩の時、四十八願を發して浄土を設けて仏に成らんと願いたまえる時、衆生往生の行を立てんと撰定したまう時、余行を撰捨し、唯念仏一行を撰定して、往生の行を立てたまえり。此の選択の願と云えるは、大阿弥陀經の説なり。

(昭法全二四四頁)

ここで法然は「念仏往生の諸行往生に勝ること」として、「浄土三部經」や『般舟三昧經』などから六義を提示し、その第一に『無量壽經』に説く法藏菩薩の因位の本願を挙げ、「撰定」や「撰捨」と共に「選択」という語を用い、それが『大阿弥陀經』の説示に基づいていると指摘している。初七日においても「阿弥陀如来の因位の本願」(昭法全二二六頁)に言及されているにもかかわらず、そこには「大阿弥陀經」や「選択」への言及はない。すなわち、この短い一節こそ、法然が『大阿弥陀經』に言及し、「選択」というタームを明示された嚆矢であると指摘できる。

『逆修説法』における念仏勸奨の説示を検討すると、初七日や二七日においては、釈尊を主格とする「一向」を

キーワードとして論理の組み立てをしていたものの、三七日や五七日においては、阿弥陀仏を主格とする「選択」を根拠として論理を構築していることが分かり、大きな質的転換を見出せる。すなわち、「一向」だけでは、釈尊による専修念仏の勧奨とはなっても、阿弥陀仏自身が往生行を取捨されたという意を汲み取ることができない。それに対して「選択」の使用によって、行者に対しては専修念仏に向かわしめる仏辺からの難易義を主張し得る揺るがぬ盾となり、他宗に対しては念仏と諸行をめぐる仏辺からの勝劣義を主張し得る最強の矛となる可能性を秘めている。だからこそ法然は、『逆修説法』以降、その思想構築に邁進し、自身が見出された「選択」の語を冠して『選択本願念仏集』と命名されたのである。

とはいえ、『逆修説法』時点では、『阿弥陀仏白毫觀』など源信著作の重視、高僧伝に見られる諸行往生の事例の引用などが多く見られ、次節に述べる『選択集』において開示されることとなる偏依善導一師等の思想は見出せない。

なお、一切経を五遍読破された法然が、あらためて『大阿弥陀経』に注目し、「選択」と「摂取」の関係性を見出された契機として、王日休撰『龍舒浄土文』二「浄土惣要序文」の次の一節を指摘できる。

大藏之中、有_二無量清浄平等覚経・阿弥陀過度人道経・無量寿経・無量寿莊嚴経。四者本為_一一経。訳者不同故有_二四名。其舛訛甚多。予久已校正。亦刊_レ板以行。今按_二此経及余経伝、為_二浄土総要。 (浄全六・八四五下)

ここで王日休は、『無量寿経』とその異訳である『無量清浄平等覚経』『阿弥陀過度人道経』『無量寿莊嚴経』を含めた都合四種の經典について「四者は本一経為り」と述べ、「舛訛が甚だ多い」異訳本を校合して、新たに王日休校輯『大阿弥陀経』を刊行したと述べている。ここで述べられる『無量清浄平等覚経』と『阿弥陀過度人道経』こそ、法然が「選択」の語を見出された『平等覚経』と『大阿弥陀経』に他ならない。

念仏一行の勧進にあたり、「一向」という理論とは異なる、新たな方策を模索していたであろう法然が、次節で述べる念仏多善根説や善導弥陀化身説など多大な思想的影響を蒙った『龍舒浄土文』に説かれる「四者は本一経為り」という一節に敏感に反応されたのは必然の流れであり、改めて自身で『大阿弥陀経』等の異訳経典を紐解かれたことは容易に推測できる⁽¹⁵⁾。

近年、『逆修説法』をめぐる⁽¹⁶⁾は、川島一通氏、安孫子稔章氏、角野玄樹氏⁽¹⁷⁾等が多くの論考を発表している。それら一連の論考は、一方で『往生要集』『阿弥陀仏白毫観』など天台浄土教の影響下にある説示の解明であり、他方で『観経疏』など善導浄土教に比重を置いた『選択集』の前段階としての説示の解明である。今後は、『逆修説法』諸本の書誌を見据えつつ、密教浄土教など、法然を取り巻く歴史的状况を踏まえた研究が必要となるだろう。

第三期・選択本願念仏期 後期―『選択本願念仏集』―

選択本願念仏期の後期に配当されるのは、建久九年春三月、九条兼美公の懇請を契機に六六歳の法然が撰述した『選択集』である。『選択集』において法然は、①三仏同心による八種選択、②弥陀化身善導の確信に基づく偏依善導一師、③勝劣難易二義、勝劣大小多少相對三義など革新的な新思想を次々に確立される。これら新思想の確立を通じて法然は、各宗派の教義を裏付けとする密教浄土教などの世界観と決別、「浄土三部経」が開示する世界観に基づく純粹浄土教の教義を構築することに成功し、浄土宗教団の独立と組織化を進める条件を整えられるのである。

①三仏同心による八種選択

法然は、『選択集』第一六章私積段において、弥陀・釈迦・諸仏が三仏同心に称名念仏を撰取し、諸行を撰捨す

るといふ八種選択思想を構築された。

すでに藤堂恭俊氏は、『逆修説法』説示時点において八種選択の素地ができあがっていたと指摘している⁽¹⁹⁾。さらに近年、南宏信氏は一連の論考を発表して八種選択の淵源を『往生要集』の記述に求めている⁽²⁰⁾。

こうした連続性を明らかにする考察が不可欠であることは言うまでもないが、浄土宗義という点から言えば、『逆修説法』において「選択」の主体が弥陀一仏に留まっていたのに対し、『選択集』において弥陀・釈迦・諸仏の三仏に拡大されている点がより重要となる。この点について安達俊英氏は『選択集』の「八選択」では、釈迦・諸仏の念仏の選び取りに対しても「選択」の語が用いられ、弥陀・釈迦・諸仏は全く対等となっている。『逆修』にみられた本願根本の強調が『選択集』では影をひそめ、また『三経釈』や『逆修』における『無量寿経』重視の態度が『選択集』に至って三経等同に変化したのは、まさにこの弥陀・釈迦・諸仏が選択主体として対等になったことに起因すると考えられよう。「法然が釈迦・諸仏をも選択主体に加えたのは、結局、念仏の教えの普遍性・絶対性を示さんが為であるといえよう」と指摘を施している⁽²¹⁾。もちろん、三仏対等・三経等同といっても、その根本は、阿弥陀仏による選択本願であることは『選択本願念仏集』という書名からも明らかである。

『法然上人伝絵詞(琳阿本)』以降の各種法然伝に伝えられているように法然は、善導『観経疏』所説の開宗の文を味読した結果、阿弥陀仏ご自身の本願に基づく称名念仏による浄土往生の確信を得られた。一方、『四十八巻伝』五に「あるとき上人月輪殿にして、山僧と参会の事侍しに、かの僧浄土宗を立給なるは、いづれの文によりて、立給ぞやとたづぬるとき、善導の観経疏の附属の文なりと答給」(『法伝全』二二頁)と伝えられるように、法然は善導『観経疏』所説の「望仏本願の文」を開宗の文として天台宗僧侶に提示している。釈尊を開祖とする仏教において、釈尊の「意」が称名念仏一行の勸奨にあるとする説示は、教団としての浄土宗開宗に不可欠の要素であると判

断された何よりの証左であろう。

さらに法然は、『観経疏』において善導が、無著（菩薩）撰『撰大乘論』や世親（菩薩）撰『撰大乘論釈』等を依拠として成立した念仏別時意説に反駁するため、四重の破人などを通じて（仏）説という点を強調し、さらには随順仏願・随順仏教・随順仏意という三仏・三経を説く深心積全文を『選択集』に引用される。

こうした弥陀化身善導による三仏・三経を重視する説示に基づいて法然は、自身が見出した「選択」思想を加味して八種選択思想を構築し、選択本願念仏の普遍性・絶対性を確立することに成功されたのである。

② 弥陀化身善導の確信に基づく偏依善導一師

この時期以降の法然の思想の基盤となる弥陀化身善導の確信に基づく偏依善導一師の提唱も、『選択集』を嚆矢とする。⁽²²⁾ここでは善導の位置付けを巡る変遷を簡略に振り返りたい。

『無量寿経釈』には、『往生礼讃』所説の専修を重んじる祖師を抽出した善導義補助の七師を説く一節に次のようにある。

二には善導に依って得失を論ず。三には感師等の義を以て善導の義を助く。(中略)次に感師智栄等に依って善導の義を補助せば是に七有り。
(昭法全七九頁、八六頁)

ここで法然は、東大寺講説に連なる大衆に対して善導の「正」なる立場を伝えるため、七師を通じて善導の義を補助していることが分かり、こうした善導義補助の姿勢は、『観無量寿経釈』にも見出せる。また、『阿弥陀経釈』では、善導の教えについて「則ち相承血脈の法有ること無し。面授口決の儀に非ず」（昭法全一四五頁）として、師資相承がないと指摘している。

次に『逆修説法』では、初七日では道綽撰『安樂集』所説の六大徳相承を提示するのみであるが、五七日には、次のように本願念仏を重視する祖師を各種高僧伝から抽出して善導を中心とする中国浄土五祖説を提唱するに至る。然るに浄土宗の師資相承に二の説有り。(中略)今此の五祖とは、先ず曇鸞法師・道綽禪師・善導禪師・懷感禪師・小康法師等なり。

(昭法全二六四頁)

このように「三部経釈」から『逆修説法』に至り、専修重視から本願重視へと善導の位置付けに変化はあるものの、三昧発得の聖者である善導を尊ぶ姿勢は共通している。しかし、いまだ善導が阿弥陀仏の化身であるという指摘は見出せない。

そして、『選択集』第一章私釈段では、中国浄土五祖説に菩提流支を加え三国伝来の師資相承の系譜が示される。その一方、第一六章私釈段では、偏依善導一師の立場を表明し、その理由を次の五段階を追って説示される。

第一段階 たとえ各宗派の諸師が浄土の章疏を造るといっても、浄土の教えを宗としているわけではなく、浄土の教えを宗としている善導に依ることを述べる。

第二段階 浄土の教えを宗としている諸師がいるといっても、それらの諸師が三昧を発得したわけではなく、三昧を発得している善導に依ることを述べる。

第三段階 三昧を発得したとはいっても、弟子であり師と解釈が異なる懐感に依らずに師である善導に依ることを述べる。

第四段階 師であるとはいっても、三昧を発得していない道綽に依らずに、三昧を発得している善導に依ることを述べる。

第五段階 『観経疏』末尾の一節を引用するなどして、『観経疏』が阿弥陀仏の伝説であり、直説であること、

また善導が阿弥陀仏の化身であることを述懐する。

この中、特に第五段階において法然は、「大唐に相い伝え」（昭法全三四九頁）られた『龍舒淨土文』の説示を受けて善導弥陀化身説を提唱し、それを背景に偏依善導一師論を展開している。その中、第一章段の師資相承において善導の前後に配当した道綽や懷感をさえ退けている。法然は、善導が弥陀化身であるならば、善導を「補助」する必要性よりも、善導と教えの異なる祖師を温存しておく危うさに重きをおいたのであり、その姿勢こそ「偏依」の意義に他ならない。すなわち、善導が三昧を発得された優れた人師であるだけでは、「偏依」ではなく「補助」を必要とするのであり、善導が弥陀化身であり、『觀經疏』が仏説に等しい価値をもつという確信があるからこそ「偏依」たり得るとも言い得よう。

さらに言えば、仏説に裏付けられた念仏と諸行の取捨である「選択」と弥陀化身たる善導への「偏依」は密接不可分の関係であり、法然が八種選択に続けて善導弥陀化身説に基づく偏依善導一師論を展開する意図は、「淨土三部經」の所説と善導の著作との有機的統合からなる『選択集』の所説が決して虚しいものではないことを伝えようとしたからであると指摘²³⁾できる。

③ 勝劣難易二義、勝劣大小多少相對三義

法然の『淨土立宗の御詞』には以下のように語られる。

我れ淨土宗を立つる意趣は、凡夫の往生を示さんが為なり。若し天台の教相に依らば、凡夫の往生を許すに似たりと雖も、淨土を判ずること至って淺薄なり。若し法相の教相に依らば、淨土を判ずること甚だ深なりと雖も、全く凡夫の往生を許さず。諸宗の談ずる所、異なりと雖も、惣じて凡夫の淨土に生ずると云う事を許さず。

故に善導の積義に依りて、浄土宗を興す時、即ち凡夫の報土に生ずと云うこと顕なり。

(昭法全四三九頁)

このように法然は、善導が創唱した阿弥陀仏の本願力に基づく凡入報土を明らかにするため、浄土宗を立教開宗された。善導の意を受けた法然が自身に課した使命こそ本願称名念仏の功德の深勝性を明らかにすることであり、その手段こそ「選択」思想であり、その表明こそ『選択集』撰述に他ならない。法然は、『選択集』第三章私積段において、次のように念仏諸行の勝劣難易二義を述べられる。

問うて曰く、普く諸願に約するに粗悪を選捨し善妙を選取すること、その理然るべし。何が故ぞ第十八の願に一切の諸行を選捨し、ただ偏に念仏の一行を選取して往生の本願とするや。答えて曰く、聖意測りがたし、輒く解すること能はず。然りといえども、今試みに二義を以てこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めに勝劣の義とは念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。(中略)次に難易の義とは、念仏は修し易く、諸行は修し難し。

(昭法全三一九頁)

この勝劣難易二義は、『選択集』においてはじめて成立した思想である。『逆修説法』時点では念仏勝行説に留まっておき、念仏勝行説と念仏諸行の勝劣義には大きな隔たりがある。つまり、たとえ本願念仏が阿弥陀仏の選取に基づく勝行であると主張しても、他宗の側が自宗の行はそれを凌ぐ行であると主張することは可能であり、それが当時の仏教者の常識であった。所詮、彼等の行体系の中では、称名念仏の劣行としての教学上の位置は何ら変更しない。しかし、諸行が阿弥陀仏の選捨された「劣行」であると明言することによってその状況は一変する。そうした意味において阿弥陀仏の選取に基づく念仏と諸行との勝劣義の成立は正に画期的であり、本願念仏を「ひとりだちをせさせ」(「つねに仰せられける御詞」昭法全四九三頁)る浄土宗教団独立の思想的根拠となるのである。

なお、念仏諸行の勝劣難易二義の成立に至る過程において、念仏と諸行を巡る大小義や多少義も「三部経釈」

『逆修説法』を経て順次成立し、『選択集』において三義が揃うこととなる。そして、これら勝劣・大小・多少相對三義の成立は『龍舒淨土文』に説かれる「念仏多善根の文」のわが国への渡来を契機とするものである。

いずれにしても法然は、本願称名念仏の功德の深勝性を高め、『選択集』第十一章段において「極悪最下の人のために極善最上の法を説く」（昭法全三三七頁）と述べられる。まさにこうした思想を成立させることによって法然は、善導が提唱した凡入報土を論理的に確立することに成功するのである。²⁴

法然の主著であり、浄土宗第一の聖典である『選択集』の思想は、多方面からの研究が積み重ねられている。特に近年は、兼岩和宏氏²⁵、春本龍彬氏による廬山寺蔵『選択集』研究の進展が著しい。両氏による一連の研究を通じて、廬山寺蔵『選択集』をはじめとする写本・版本を含めた『選択集』諸本の書誌解明と草稿本としての廬山寺蔵『選択集』の位置付けが大きく進むこととなった。今後は、『選択集』の思想研究はもちろんのこと、門下による『選択集』引用や註釈書の撰述、他宗人師による『選択集』批判の考察等、各方面からの『選択集』の総合的研究の進展が望まれる。

これまで言及してきた①八種選択・②偏依善導一師・③勝劣難易二義といった新思想を通じて法然は、三仏三經・弥陀化身善導という仏説（仏辺）を基調とする『選択集』の思想構築に取り組まれる。すなわち法然は、『選択集』の教理構造を機辺と仏辺に明確に二分した上で、機辺と仏辺を結びつける紐帯として凡夫（機辺）と仏（仏辺）という両者の立場を兼ね具えた善導を据えられた。こうして法然は、四三歳の開宗の文、すなわち本願念仏への回心から二三年を経て、立教開宗の宣言書である『選択集』を撰述し、仏教そのものの大転換を成し遂げること²⁷に成功されたのである。

(二) 選択本願念仏思想普及伝道期―各種法語、『一枚起請文』等―

これまで『昭和全』第一輯「教書篇」に配当された法然遺文を中心に選択思想の成立という視点を中心に法然の思想史について整理を施してきた。言うまでもなく法然遺文は、伝源智編『法然上人伝記附一期物語』全一卷、親鸞編『西方指南抄』全六卷、道光編『黒谷上人語灯録』全一八卷（『漢語灯録』『和語灯録』『拾遺黒谷上人語灯録』）という三種の遺文集を基本とする。その中、『西方指南抄』は親鸞の視点を、『黒谷上人語灯録』は聖光・良忠の視点を通して編纂された遺文集であり、法然遺文の書誌的研究は進展しているものの、今後、こうした編纂の視点を踏まえた研究がますます必要になるであろう。

そうした点を踏まえつつ、あえて指摘するならば、前述した【法然上人思想史（案）】において言及した以外、ほとんどの遺文が選択本願念仏思想の普及伝道を目指した内容であると捉えられる。このように『選択集』撰述以前と以後の法然のスタンスは、選択本願念仏思想の「思想構築期」と「普及伝道期」とに二分されると言えよう。

『選択集』撰述後、多くの法語を遺された法然の思想は、最終的に『一枚起請文』の説示へと帰結する。『一枚起請文』は、浄土宗の教えの肝要である選択本願念仏の意味内容と共に、念仏行者の安心・起行・作業等について平易かつ簡潔に説き示されており、「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」（昭法全四一五頁）という本文末尾の一節こそ、法然がその生涯を通じて理論構築に努め、人々に説き続けられた教えである。まさに『一枚起請文』こそ、法然にとって釈迦・弥陀二尊に向けて自身の説くところに嘘偽りのないことを誓う「起請文」であり、八〇年の生涯を終えられるにあたって、未来永劫に及ぶ一切衆生に向けられた「付属」の書であり、「遺書」「形見」とも呼べるものである。そうしたことから、ここでは『一枚起請文』の思想に絞って言及したい。

『選択集』と『一枚起請文』の両者には一四年という時間的隔たりがあり、その間に法然を取り巻く状況は否応

なく移り変わっている。それはすなわち、『選択集』において開示した選択本願念仏思想、すなわち三仏・三経と弥陀化身善導という仏辺によって裏付けられた称名念仏の普遍的・絶対的な価値付けについては微塵の揺るぎもないものの、機辺において具え実践すべき安心（三心）や作業（四修）等を誤って理解し、念仏相続を軽んじるようになってしまった門下の異義と、そこから引き起こされることとなった専修念仏教団への弾圧、ひいては、選択本願念仏思想の存続危機という許容せざる事態であった。そして、それこそが『一枚起請文』執筆の内的動機と推定される。

『選択集』における機辺の説示の中、第八章と第九章の二章は、その篇目に「念仏の行者、必ず三心を具足すべきの文」（昭法全三三八頁）、「念仏の行者、四修の法を行用すべきの文」（昭法全三三四頁）とあるように「念仏の行者」が主格となつて、「必ず三心を具足」し、「四修の法を行用すべき」と述べられる。つまり、第一章・第二章における一代仏教の中から選択本願念仏へと帰納的に導かれる構造を経て、第三章から第七章、及び、第一〇章から第一六章に至る全一二章で明らかにされる三仏同心からなる選択本願念仏の実践によって無量の功德を蒙る念仏行者であるが、その心のありよう（三心）や日々の暮らし（四修）について第八章・第九章において演繹的に説き明かされるのである。この両章における法然の撰述姿勢は、『観経疏』と『往生礼讃』における三心積、『往生礼讃』と『西方要決』における四修積の全文を引文とする一方、簡略な私積に留まっている。そのことは、法然の思想構築の中で三心・四修の積極的受容が『選択集』直前であり、『選択集』撰述時の法然にとって三心・四修は、善導等の説示通りに受けとめていればそれで充分であると想定していたことを伺わせる。

ところが、三心・四修、特に衆生の心のありようである三心について、それが目に見えないものであることから、かえって多くの説明が必要となり、法然は『観経疏』等に説示される三心の理解をかみ砕いて平易にし、あるいは、

その文言を一旦離れるなどして、実に多様かつ柔軟に三心具足の姿を説き示される。その結果、種々の法語や消息・問答などにおいて、他のいかなる教学用語よりも三心は、多くの紙幅をさいて懇切に解説を施されることとなる。そうした中、『信空上人伝説の詞 其一』において法然は、いわゆる行具の三心の思想的根拠について次のように述べられるようになる。

ある人問うていわく、善導本願の文を釈し給うに、至心に信樂して我が国に生ぜん^と欲して、の安心を略し給う事、なにかあるや。答えての給わく、衆生称念すれば必ず往生を得、と知りぬれば、自然に三心を具足するゆえに、このことわりをあらわさんがために略し給えるなり。

(昭法全六七頁)

ここで法然は、善導が念仏往生願を解釈された『往生礼讃』の一節において三心を省略された理由について問われ、それは念仏相続による決定往生を知らば自ずと三心が具足するという道理を明らかにするためであると答えられる。つまり法然は、弥陀化身善導が阿弥陀仏自身の直説としてあえて三心を省略したと理解されたのである。こうしたことから法然は、あるいは三心を多様かつ柔軟に説示され、あるいは三心が念仏相続によって具足されるという解釈を広く展開されるようになったのである。

さらに法然は、三心だけでなく、四修や五念門も念仏相続によって具足されるという法語もいくつか遺されている。こうした法然の思いは、『一枚起請文』の「ただし三心・四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候なり」という念仏相続による三心や四修の具足を説く一節に帰結し、それは聖光・源智へと継承されて、浄土宗義の真骨頂である結歸一行三昧の思想へと展開していくことになるのである。⁽²⁸⁾

三、おわりに

文治六年（一一九〇）二月（『阿弥陀経釈』奥書など）に開筵されたとされる東大寺講説であるが、そのきっかけは初代大勧進職であり、自身を「南無阿弥陀仏」と名のり、多くの弟子に阿弥号を授けた俊乗房重源の招請であるという。近年、愛知県西光寺地藏菩薩納入品の「一行一筆結縁経」（無量義経）から法然真蹟の署名が発見された。⁽²⁹⁾この「結縁経」は、やはり法然真蹟の署名が遺る大阪一心寺に伝わる「一行一筆結縁経」（般若心経）『阿弥陀経』と同一形態のものであり、これら二種の結縁経は、重源を中心とする大仏勧進事業の一環であり、それは阿弥号を名のる浄土教者の活躍抜きには語れない。一心寺蔵「一行一筆結縁経」の奥書には「文治五年六月二十四日」とあり、東大寺講説の前年に法然が署名されたことが分かる。

こうした二種の結縁経からは、当時の密教（高野山等）・南都（東大寺等）・天台（比叡山等）の三大拠点の本寺と別所、僧綱と聖という広範な地理的・人的ネットワークが密接に結び付き、同時に密教浄土教・南都浄土教・天台浄土教と称名念仏の広まりの実態を如実に知ることができる。その一方、二種の結縁経への署名を通じて法然は、密教浄土教などの実態と限界を教義的にも教团的にも目の当たりにすることとなり、あらためて阿弥陀仏の大慈悲を明らかにする「浄土三部経」の世界観を最終的な信仰の拠り所とする純粹浄土教の構築を急ぐ必要性に迫られたことであろう。そして、その強い思いこそ「選択」思想構築の原動力になったと考えられる。

密教浄土教研究をはじめ、近年の中世史研究の進展には目を見張るものがある。今後、法然思想史研究は、各種遺文の精密な検討は言うまでもなく、当時隆盛であった密教浄土教をはじめとする各種信仰状況を俯瞰し、その実

態把握と並行して進めていくことが必要となってくるであろう。

註

- (1) 石井教道氏『選択集全講』（平楽寺書店、三頁、四頁、一九五九）、香月乘光氏「法然上人の浄土開宗における仏教の転換」（『法然浄土教の思想と歴史』山喜房仏書林、一九七四）参照
- (2) 『四十八巻伝』六には「あるとき上人往生の業には、称名にすぎたる行、あるべからずと申さるるを、慈眼房は、観仏すぐれたるよしをの給ければ、称名は、本願の行なるゆへに、まさるべきよしをたて申たまふ」（『法伝全』二四頁）とあり、法然はすでに比叡山中において称名勝行説を表明しているとの伝承がある。
- (3) 拙稿「法然上人『往生要集』四積書の研究―助念方法門、惣決要行積をめぐって―」（『法然上人研究』五、一九九六）、同「法然上人『往生要集』積書撰述についての一考察」（『仏教文化学会紀要』四・五、一九九六）、同「法然上人における三心積の受容と展開（一）―『往生要集』四積書を中心に―」（『小澤憲珠名誉教授頌壽記念論文集 大乘仏教と浄土教』二〇一五）、同「法然上人における四修積の受容と展開①―『往生要集』四積書を中心に―」（『三康文化研究所』五一、二〇二〇）
- (4) 南宏信氏「法然『往生要集』諸積書の六義について」（『佛敎大学大学院紀要』三四、二〇〇六）、同「『往生要集』の構成について」（『佛敎大学大学院紀要』三五、二〇〇七）、同「法然における『往生要集』の受容について」（『仏教論叢』五二、二〇〇八）、同「法然門下における『往生要集』理解について」（印仏研究五七一、二〇〇八）ほか
- (5) 齋藤蒙光氏「法然上人の『往生要集』観」（『法然仏教の諸相』二〇一四）ほか。
- (6) 下端啓介氏「法然『往生要集』における合・広・略・要の関連性」（『佛敎大学大学院紀要 文学研究科篇』四八、二〇二〇）、同「『往生要集義記』における法然の『往生要集』解釈」（印仏研究六九一、二〇二〇）、同「法然の『往生要集』解釈と良忠によるその継承と深化」（『佛敎大学大学院紀要 文学研究科篇』四九、二〇二二）、

- 同「法然『往生要集註要』における「開・合」解釈の意義」(『仏教論叢』六六、二〇二二)ほか
- (7) 善裕昭氏「法然『三部経大意』における諸問題」(『浄土宗学研究』二二、一九九六)
- (8) 拙稿「『選択集』における善導弥陀化身説の意義―選択と偏依―」(『仏教文化研究』四二・四三、一九九八)
- (9) 岸一英氏「『逆修説法』と『三部経釈』」(『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 研究篇』一九八八)、同「『三部経釈』の研究(二)」(『法然上人研究』一、一九九二)、同「無量寿経釈 古層の復元―『三部経釈』の研究(二)―」(佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化 二〇〇四)、同「阿弥陀経釈 古層の復元―『三部経釈』の研究(五)―」(高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏教学論叢 二〇〇四)、同「阿弥陀経釈 古層復元本」(『佛敎文化研究』五四、二〇一〇)ほか
- (10) 拙稿「法然上人『三部経釈』に説かれる「選択」をめぐって」(『三康文化研究所年報』三一、二〇〇〇)
- (11) 大谷旭雄氏「善導義補助の七師と法然」(『法然浄土敎の周縁』坤、二〇〇七)
- (12) 拙稿「『選択集』における善導弥陀化身説の意義―選択と偏依―」(『仏教文化研究』四二・四三、一九九八)、同「法然上人における三心釈の受容と展開(二)―東大寺講説「三部経釈」を中心に―」(『小此木輝之先生古稀記念論文集 歴史と文化』二〇一六)、同「法然上人における四修釈の受容と展開(二)―東大寺講説「三部経釈」を中心に―」(『三康文化研究所年報』五三、二〇二二)
- (13) 井上慶淳氏「漢語『三部経釈』における新層古層説の再検討」(印仏研究六九―二、二〇二一)
- (14) 下端啓介氏「法然『無量寿経釈』の「古層」の検討」(『佛敎大学仏敎学会紀要』二八、二〇二三)
- (15) 拙稿「法然における「選択」思想の成立とその意義」(『仏敎学』五一、二〇〇九)
- (16) 川島一通氏「『逆修説法』から『選択集』へ」(『大正大学大学院研究論集』二三、一九九九)、同「法然所修『逆修法会』の特異性」(『三康文化研究所年報』三三、二〇〇二)
- (17) 安孫子稔章氏「『逆修説法』の研究」(『浄土学』四八、二〇一一)、同「『逆修説法』二七日所説の念仏勝義性を示す八文について」(『浄土学』四九、二〇一二)、同「『逆修説法』三七日所説の阿弥陀仏入涅槃説示について」

- 〔浄土学〕五〇、二〇一三）、同「法然逆修法会についての一考察」（『大正大学大学院研究論集』三八、二〇一四）ほか
- (18) 角野玄樹氏「逆修説法」第三七日の本願解釈」（『仏教学部論集』九七、二〇一三）、同「逆修説法」第五七日における専修念仏説の立証」（『佛敎大学仏教学会紀要』一八、二〇一三）、同「逆修説法」第二七日における八種義の成立」（『仏教学部論集』九八、二〇一四）、同「逆修説法」第三七日における「無量寿経」解釈」（『佛敎大学仏教学会紀要』一九、二〇一四）ほか
- (19) 藤堂恭俊氏「法然の偏依善導と八種選択義」（『法然上人研究』一九七六）
- (20) 南宏信氏「法然「八種選択義」の淵源―『往生要集』から『選択集』へ―」（『浄土宗学研究』四一、二〇一五）、同「法然「選択証誠」成立考」（『印仏研究』六五―一、二〇一六）、同「法然「選択留教」に見る『往生要集』の影響」（『浄土宗学研究』四四、二〇一八）、同「法然「選択我名」成立考」（『仏敎文化研究』六五、二〇二二）ほか
- (21) 安達俊英氏「法然上人における選択思想と助業観の展開」（『浄土宗学研究』一七、七六―七七頁、一九九二）
- (22) 阿川文正氏「各種法然上人伝にあらわれた善導大師」（『善導大師研究』一九八〇）、大谷旭雄氏「弥陀化身善導と勢至化身法然の信仰―『九卷伝』『四十八卷伝』を中心に―」（『法然浄土敎の総合的研究』一九八四）
- (23) 拙稿「『選択集』における善導弥陀化身説の意義―選択と偏依―」（『仏敎文化研究』四二・四三、一九九八）、同「廬山寺蔵『選択集』における偏依善導一師をめぐる推敲」（『仏敎文化学会紀要』一〇、二〇〇二）
- (24) 拙稿「法然上人「選択思想」と「勝劣難易二義」をめぐる考察」（『仏敎論叢』四三、一九九九）、同「法然上人における勝劣義の成立過程―『逆修説法』から廬山寺蔵『選択集』へ―」（『仏敎文化学会紀要』八、一九九九）、同「法然上人における難易義成立の意義―機辺から仏辺へ―」（『阿川文正先生古稀記念論文集』法然浄土敎の思想と伝歴）二〇〇二）、同「法然上人における勝劣・大小・多少相對三義の成立について―「念仏多善根の文」渡来の意義―」（『宮林昭彦先生古稀記念論文集』仏敎思想の受容と展開）二〇〇四）、同「法然上人による「人中分陀利華」釈説示の意義―勝劣難易二義との関連をめぐって―」（『佐藤良純先生古稀記念論文集』インド文化と仏敎思想

の基調と展開」二〇〇三)

(25) 兼岩和広氏「廬山寺蔵『選択集』の草稿的位置づけをめぐって」(『仏教文化研究』四二・四三、一九九八)、同「廬山寺蔵『選択集』の原初形態」(『東海仏教』四四、一九九九)、同「廬山寺蔵『選択集』第三章について」(『仏教論叢』四三、一九九九)、同「『選擇集』と『逆修說法』」(『仏教大学院紀要』二八、二〇〇〇) ほか

(26) 春本龍彬氏「義山所説の『選択集』稿本」と「廬山寺本」をめぐって」(『仏教文化学会紀要』二六、二〇一七)、同「廬山寺蔵『選択集』第十五章段における『観念法門』の引文をめぐって」(『大正大学大学院研究論集』四三、二〇一九)、同「廬山寺蔵『選択集』第五章段の末尾における見せ消ちについて」(『仏教論叢』六三、二〇一九)、同「廬山寺本『選択集』の書誌学的考察」(『印仏研究』六八―二、二〇二〇) ほか

(27) 拙稿「『選択集』の構造―偏依善導一師―」(『印仏研究』五五―一、二〇〇六)

(28) 拙稿「『一枚起請文』の成立をめぐる一考察(上)」(『廣川堯敏教授古稀記念論集 浄土教と仏教』二〇一四)、同「『一枚起請文』の成立をめぐる一考察(下)」(『藤本浄彦先生古稀記念論文集 法然仏教の諸相』二〇一四)、同「選択本願念仏と結帛一行三昧」(『仏教文化学会十周年・北條賢三博士古稀記念論文集・インド学諸思想とその周延』二〇〇四) ほか

(29) 青木淳氏・林田康順「特集 愛知・西光寺の国重文 地藏菩薩納入品「結縁経」に源空の署名を確認―初期浄土教団を知る貴重な手がかり―」(『和合』二頁―七頁、二〇一九年一〇月号)

キーワード 選択、本願、勝劣難易、偏依善導一師、弥陀化身善導、八種選択、「選択本願念仏集」